

『韓国語教育研究』(第11号) 別刷

ISSN 2186-2044

【研究論文】

日本人韓国語学習者の作文における
語彙の豊富さに関する一考察

金 珉秀

日本韓国語教育学会

2021年9月

日本人韓国語学習者の作文における 語彙の豊富さに関する一考察

金 珉秀

本研究では、語彙の豊かさを測る客観的な語彙指標を用いて、日本人韓国語初級学習者の自己紹介文における使用語彙の特徴を分析した。作文の総合的評価により学習者を下位群、中位群、上位群に分けて分析した結果、各群の平均語彙多様性(TTR)は中位群が一番高く、平均語彙密度(LD)と平均語彙洗練性(LS)は下位群が一番高い結果となったが、いずれも各群の間に有意な差は見られなかった。このことは各群の間に量的な語彙使用においては差が生じなかったことを意味するが、これは辞書使用が関連していると考えられる。一方、語彙指標と総合的評価、語彙使用の評価をそれぞれ考察した結果、各群において異なる相関関係を示していることが明らかとなった。下位群では、語彙使用の評価は総合的評価と相関が見られず、語彙指標も総合的評価と語彙使用の評価の両方との間に相関が認められなかった。中位群と上位群では、語彙使用の評価は総合的評価と有意な正の相関が認められた。中位群では、総合的評価と語節数および Type、語彙使用の評価と LD との間に有意な正の相関が認められた。上位群では、総合的評価と LS との間に有意な強い正の相関が示された。

1. はじめに

第二言語のコミュニケーション過程では、語彙1つで意思疎通が可能な場合もあり(강정희 2020:1)、時には文法的な知識なしに語彙を羅列するだけで意味が伝わることもある(김미옥 2003:32)。Laufer & Nation(1995:307)は母語話者と学習者、また下位群と上位群の学習者との著しい違いの一つは、いかに多くの語彙を知っているかということであり、特に発話や作文に現れる産出語彙数が語彙発達の最も確かな指標であるとしている。

Engber(1995)は第二言語において多様で正確な語彙の使用が作文の質を評価する上で重要な要素であり、学習者が外国語で作文を書くことが難しいと感じる主な理由は語彙不足であるとしている。このような語彙の重要性が注目されるよう

になり、韓国語教育の分野では、2000年以降に진대연(2006)、배도용(2012、2014)、남주연(2015)、남주연・김영주・김양희(2017)、박정은・김영주(2014)、안의정(2017)、원미진他(2017)、강정희(2020)などによって韓国語学習者の語彙力に関する量的研究が行われてきた。

ところが、日本人韓国語学習者における使用語彙に関する研究では、主に誤用分析に焦点が当てられており、学習者が算出した語彙がいかに多様であるかを量的に考察した研究はほとんど行われていない。そこで、本研究では、日本人韓国語初級学習者の作文に見られる使用語彙¹の特徴を語彙の豊富さの観点から量的に探ることを目的とする。そのために、日本人初級学習者の自己紹介文を中心に、語彙多様性、語彙密度、語彙洗練性といった語彙の豊富さを表す語彙指標と作文評価との相関関係を調べ、各群における使用語彙の様相を考察する。このような語彙の豊かさの特徴が明らかになれば、日本人韓国語初級学習者に不足している語彙能力が把握でき、学習者の作文の質を高めるための語彙学習や語彙指導に関する示唆を得ることができると考えられる。

2. 研究の背景

語彙の豊富さ(Lexical Richness)は、どれだけ多くの語彙を多様に使用しているのかということである。Laufer & Nation(1995)やRead(2000:200)によれば、語彙の豊富さは、語彙多様性(Lexical Diversity)、語彙密度(Lexical Density)、語彙洗練性(Lexical Sophistication)などで測ることができる²。

語彙多様性(Lexical Diversity : TTR)は、学習者が産出した延べ語数(Token)における異なり語数(Type)の割合である TTR(Type-Token Ratio)で表す³。TTR が高け

¹ 語彙教育では、聞いたり読んだりした時に理解できる語を理解語彙、話したり書いたりする時に使える語を使用語彙としている(石黒圭 2016 : 25-30)。したがって、一般的に学習者の作文に現れる語彙は使用語彙と捉えることができる。しかし、本研究では辞書の使用を許可した作文を研究資料としており、作文で使われている語彙は一般的な意味で使われる使用語彙とは異なる性質のものであるが、本研究ではこの語彙についても便宜上、使用語彙と呼ぶこととする。

² 語彙の豊富さを測定する語彙の指標には、他に語彙の独創性(lexical originality)、誤用の数(numbers of errors)などがある(Laufer & Nation 1995、Read 2000)。

³ TTR は Templin(1957)によって導入された概念で、児童の言語発達を量的に測定するために利用されたが、その後第二言語の発達研究にも幅広く利用されるようになった(구다영 2017:26)。ところが、テキストが長くなると、異なり語数(Type)が増えるので、TTR は低くなるという問題点がある(Read 2000 : 201-203)。しかしながら、TTR は比較的測定しやすく、コーパス

れば、多様な語彙が使われ、語彙が豊富であることを意味する。つまり、同一の語彙を繰り返さずに、類義語を使うなどして新しい語彙を多く使うと、TTR は高くなる。一方、この値が低ければ限られた語彙を繰り返して使用していることや産出する語彙自体が乏しいことが考えられる。

$$\text{語彙多様性(TTR)} = \frac{\text{異なり語数(Type)}}{\text{延べ語数(Token)}} \times 100$$

語彙密度(Lexical Density : LD)は延べ語数(Token)における内容語数の割合である。延べ語数は実質的な意味を伝える内容語と文法的な意味を成している機能語に分けることができるが、発話やテキスト内に名詞、動詞、形容詞、副詞などの内容語⁴が多ければ語彙密度が高くなる。つまり、語彙密度は、学習者が実質的な意味を表す内容語をどれだけ多く使用しているかが分かる指標である⁵。

$$\text{語彙密度(LD)} = \frac{\text{内容語数}}{\text{延べ語数(Token)}} \times 100$$

語彙洗練性は延べ語数(Token)における低頻度語数の割合を表す指標である。これは、学習者がいかに低頻度語を含み、洗練された語彙を産出しているかを量的に示す指標である(Read 2000:203)。低頻度語は学習者の熟達度を基準にしてそれより上位レベルの語彙を指す。したがって、学習者の熟達度から考えて、学習者がよく使っている高頻度語ではなく、より高い学習レベルの低頻度語を多く使用すると、語彙洗練性は高くなる。

を分析しやすいという利点があることから、より一般的に広く使用されている指標である(Johansson 2008:63)。一方、TTR より延べ語数(Token)と異なり語数(Type)の方が語彙能力を正確に反映できるという研究もある(Miller 1991)。

⁴ 韓国語を対象とした語彙密度の測定研究では、内容語の範囲に違いが見られている。강범모, 김홍균(2009)、남주연(2015)では一般名詞、動詞、形容詞、一般副詞だけでなく、依存名詞、固有名詞、代名詞、数詞、冠形詞、接続副詞、感嘆詞、指定詞、補助用言までを内容語と捉えているが、本研究では、배도용(2012)、안의정(2017)、강정희(2020)と同様に一般名詞、動詞、形容詞、一般副詞を内容語と捉えた。

⁵ 語彙密度は Ure(1971:445)によって導入された概念で、テキストのジャンルに影響されやすい。例として、小説より新聞記事のような説明的文章の語彙密度は高く、また口語より文語の語彙密度の方が高いとされている。

$$\text{語彙洗練度(LS)} = \frac{\text{低頻度語数}}{\text{延べ語数(Token)}} \times 100$$

語彙洗練性は一般的に、特定の語彙リストとの照合を行って算出する。本研究では、国立国際教育院の韓国語能力試験センターの HP 上(<https://www.kref.or.jp/examination>)に公開されている TOPIK の語彙リスト(初級、中級)の中で中級の語彙を低頻度語とみなした。

3. 研究方法

3.1 研究対象と資料収集

本研究では、日本の A 大学で筆者が担当している作文授業において日本人韓国語初級学習者 29 名(男子学生 3 名、女子学生 26 名)が書いた自己紹介文を分析対象とした。この科目は韓国語入門、初級科目を履修した学生を対象とした選択科目である。学習者は 1 年生 1 名、2 年生 6 名、3 年生 11 名、4 年生 11 名で、学部は多様である。本研究では授業時に書かせる分量は約 300 字~500 字程度であるが、TTR はテキストの長さに影響されることが指摘されており(Read 2000:201-203)、テキストが長くなれば長くなるほど TTR は減少することから、本研究では約 300 字程度のものを選定した⁶。

A 大学の作文授業は 1 つのテーマにつき 2 回の授業時間(週 1 回、1 授業あたり 100 分)を要する。1 回目の授業はテーマに関連する日本人学習者の作文 4 編を読みながら、文法や語彙の誤り、分かち書きの誤りなどについて学ぶ。テーマに関連する語彙や表現なども学ぶ。2 回目の授業では、最初の約 20 分間でマインドマップを描きながらテーマに関する全体構成を行い、その後、約 40 分間で作文を完成させる。作文は筆者が用意した原稿用紙に作文を書かせた。辞書の使用は自由であるが、翻訳ソフトによる文全体の翻訳は禁止した。

⁶ 旧体制の TOPIK 初級試験では、書き取り 47 番の問題として 150 字~300 字程度で作文をする問題が出題されていたが、国立国際教育院の韓国語能力試験センターの HP 上(<https://www.kref.or.jp/examination>)に公開されている「自己紹介」に関する模範解答例(第 13 回、第 30 回)の語節数はそれぞれ 69 語節、73 語節であった。これを参考に、2015 年度から 2019 年度の間に収集した自己紹介文(합니체、全 61 編)のうち、約 300 字程度(60 語節~78 語節、総 1,979 語節)のものを研究対象とした。

3.2 評点方法

学習者の自己紹介文の評価は、国立国際教育院の韓国語能力試験センターの H P 上に公開されている TOPIK 初級試験(旧体制)の1時限目の47番問題(書き取り)の採点基準(表1)に従って行った。なお、評価者2人による採点平均値(30点満点)を評点とした⁷。

表1. TOPIK 初級試験(旧体制)の書き取りの採点基準

| 구분 | 채점 근거 | 점수 구분 | | | |
|------------------------|----------------------------|--------------------------|-------|-------|-------|
| | | 상 | 중 | 하 | |
| 내용 및 과제 수행 (9 점) | 1) 주어진 과제를 이해하였는가 | 9-7 점 | 6-4 점 | 3-1 점 | |
| | 2) 주제와 관련된 내용으로 구성되었는가 | | | | |
| | 3) 내용에 일관성이 있는가 | | | | |
| 글의 전개 구조 (6 점) | 1) 문장 간의 연결이 긴밀하며 자연스러운가 | 6-5 점 | 4-3 점 | 2-1 점 | |
| | 2) 내용의 전개가 자연스러운가 | | | | |
| | 3) 글의 시작과 마무리를 적절하게 구성하였는가 | | | | |
| 언어 사용 (15 점) | 어휘 (6 점) | 초급 수준의 어휘를 적절하게 사용하였는가 | 6-5 점 | 4-3 점 | 2-1 점 |
| | 문법 (6 점) | 문법적으로 올바른 문장으로 글을 구성하였는가 | 6-5 점 | 4-3 점 | 2-1 점 |
| | 맞춤법 (3 점) | 맞춤법, 띄어쓰기 등이 어법에 맞는가 | 3 점 | 2 점 | 1 점 |
| 총점(30 점) | | | | 점 | |

表1によると、総合的評価は、作文の内容、内容の展開および構成、言語使用といった分析的評価の評点の合計点(30点)となっており、言語使用に関する評価の中で語彙使用に関する評点は6点である。

本研究では、表1の総合的評価によって、日本人初級学習者の自己紹介文を下位群、中位群、上位群の3つのグループに分けて考察する。学習者29名の自己紹介文の平均は23.07点(30点満点)で、標準偏差が2.72であった。この結果から、上位群は平均に標準偏差を足した25.79点以上、下位群は平均から標準偏差を引いた20.35点以下とし、その間の点数のものを中位群として定義しようとした。ところが、上位群と下位群が中位群に比べて少なかったため、この基準を参考に25.

⁷ 評価者間信頼性はカッパ係数でおおむね一致することが確認されたが(K=0.266, p<.001)、初級レベルの語彙を適切に使用したかという項目においてはかなり一致した(K=0.613, p<.001)。なお、評価者2人の日本における韓国語教育歴は、それぞれ17年、10年である。

5 点以上を上位群、20.5 点以下を下位群、その間の点数のものを中位群として捉えた。この分類の結果、下位群は 5 名(17.3%)、中位群は 17 名(58.6%)、上位群は 7 名(24.1%)となった。記述統計は表 2 と表 3 のとおり、語彙使用の評価も総合的評価と同様に上位群>中位群>下位群の順に高いことが分かる。

表 2. 各群における総合的評価の記述統計

| | 満点 | 平均値 | 標準偏差 | 最小値 | 最大値 |
|-----------|----|-------|------|------|------|
| 下位群(N=5) | 30 | 19.4 | 1.29 | 18 | 20.5 |
| 中位群(N=17) | 30 | 22.68 | 1.55 | 21 | 25 |
| 上位群(N=7) | 30 | 26.64 | 1.25 | 25.5 | 29 |

表 3. 各群における語彙使用の評価の記述統計

| | 満点 | 平均値 | 標準偏差 | 最小値 | 最大値 |
|-----------|----|------|------|-----|-----|
| 下位群(N=5) | 6 | 3.80 | .447 | 3 | 4 |
| 中位群(N=17) | 6 | 4.59 | .507 | 4 | 5 |
| 上位群(N=7) | 6 | 5.29 | .488 | 5 | 6 |

また、表 1 の採点基準による評価者 2 名の総合的評価と評価尺度の相関行列は表 4 のとおりである。

表 4. 総合的評価と評価尺度の相関行列

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|-----------|--------|--------|--------|--------|--------|---|
| 1. 総合的評価 | 1 | | | | | |
| 2. 内容の一貫性 | .794** | 1 | | | | |
| 3. 全体の構成 | .834** | .740** | 1 | | | |
| 4. 語彙 | .913** | .605** | .659** | 1 | | |
| 5. 文法 | .871** | .499** | .586** | .856** | 1 | |
| 6. 正書法 | .652** | 0.266 | .429* | .584** | .580** | 1 |

* $p<.05$ 、** $p<.01$

表 4 から、総合的評価は、特に初級レベルの語彙を適切に使用しているかどうかという語彙使用の評価尺度と強い正の相関関係があることが明らかとなった($r = .913^{**}$)。このことは使用語彙に関する語彙教育により学習者の作文の質が向上する可能性を示唆していると考えられる。本研究では、語彙の豊富さという観点から学習者の語彙使用の

様子を考察することを目的としており、各群の語彙指標が総合的評価および語彙使用の評価とどのような相関関係にあるかを中心に考察する。

3.3 分析方法

原稿用紙に書かれた作文は MS-Word に入力しデジタル化し、スペルミスを修正したファイルを作成した⁸。その後、形態素解析のためにテキストファイルに直した。形態素解析や頻度分析などの統計処理は Python(3.8Version)を、相関関係や分散分析などの統計分析は SPSS(27.0.1Version)を用いた。

また、品詞の判定は『標準国語大辞典』に従って行った。語彙数は『標準国語大辞典』の見出し語と「ハングル正書法」の分かち書き規定を基準に分析したが、分かち書き規定は許容ではなく原則に従った⁹。

4. 結果と考察⁰

4.1 語節数、文数、1文当たりの語節数

日本人初級学習者の自己紹介文における語節数は 60 語節~78 語節であり、評点との関係は図 1 のとおりである。各群の平均語節数は、下位群(71)>上位群(67.86)>中位群(67.59)の順に高く、下位群の語節数が他の群に比べてやや高い傾向にある。

⁸ 조숙연·박영민(2018 : 156)によると、韓国語の自然言語処理をする形態素解析器は分かち書きを認識し、反映するので、分かち書きが間違っていると単語分析に影響される。また、誤字や脱字がある場合も分析結果が異なってくるとされている。本研究は学習者の使用語彙の誤用ではなく、学習者が自己紹介文を書く際に使用する語彙のレベルを考察することを目的としているため、これらの誤用については修正し分析した。

⁹ 補助用言と本用言は空けて書くという「ハングル正書法」の原則通りに、それぞれを語彙として捉えた。また、여름^방학のように『標準国語大辞典』の見出し語に載っている合成語の場合も、名詞と名詞の間を空けて書くのが原則であるため、여름と방학을それぞれ語彙として分析した。補足として、『標準国語大辞典』では、名詞と名詞の間を空けて書くのが原則だが、繋げて書くのを許容している場合はその間を記号「^」を用いて表示している。

¹⁰ 各群の語彙指標の記述統計は 4.4.1 節の表 6 参照。

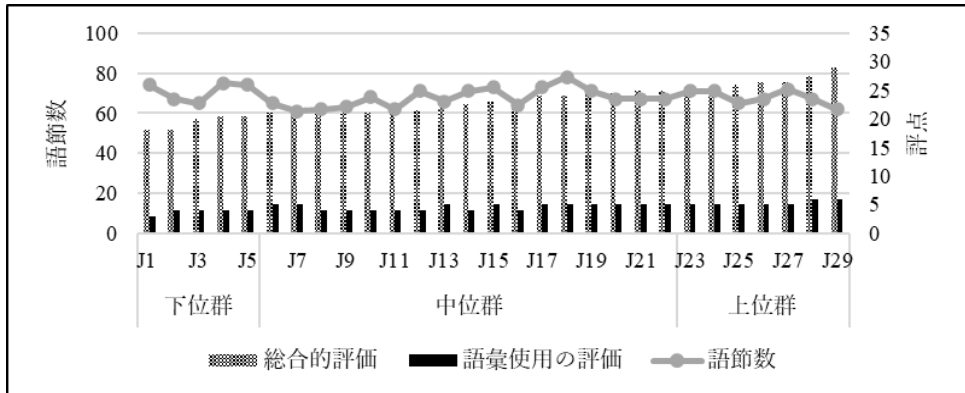


図1. 語節数と評価

一方、平均文数は、中位群が他に比べて多い(中位群(12.47) > 下位群 = 上位群(11))が、図2に見るように全体的にばらつきが見られる。

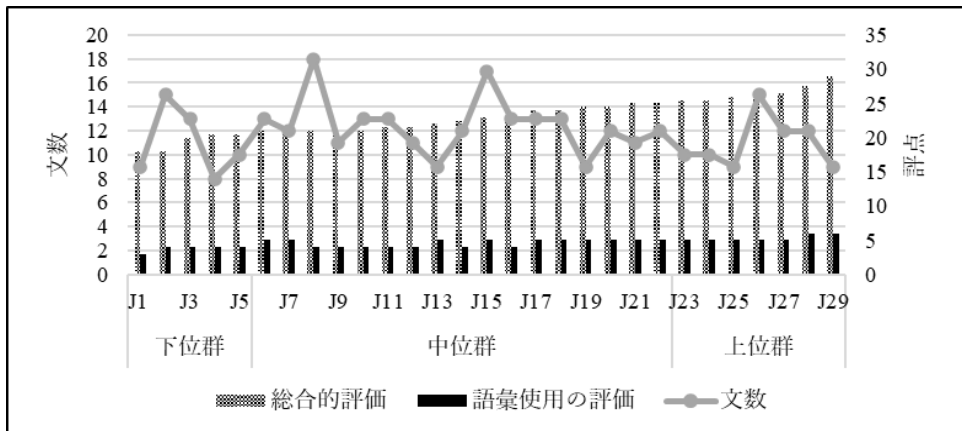


図2. 文数と評価

また、各群の1文当たりの平均語節数は、下位群(6.89) > 上位群(6.34) > 中位群(5.58)の順に高く、中位群が他に比べて少ない傾向にある(図3)。1文当たりの平均語節数が一番多い下位群では(1)、(2)のように長い文を書く事例がよく見られた。

- (1) 예를 들면 치즈랑 *새를(✓닭고기를) 좋아하니까 *치즈닭갈비(✓치즈닭갈비를) 정말 좋아합니다. (J1)

- (2) 중학생 때부터 K-pop 을 좋아해서 가사의 의미나 TV 의 자막이 없으면 *의미가(✓의미를) 알고 싶기 때문입니다.(J4)

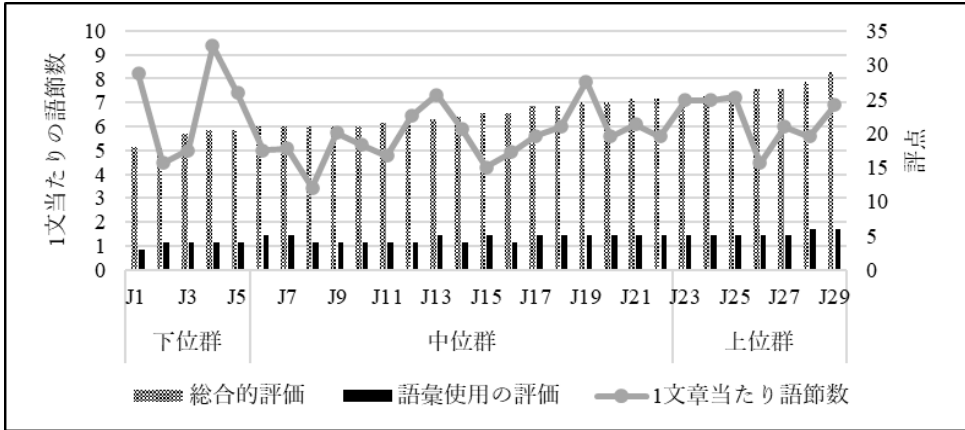


図3. 1文当たりの語節数と評価

4.2 Type と Token

Type と Token は、全体的に比例していることが分かる(図4)。各群の平均 Type は、下位群(60.60) > 上位群(60.14) > 中位群(59.76)の順に高いが、各群の間に大きな差は見られない。一方、平均 Token は、下位群(97.80) > 上位群(95.57) > 中位群(94.53)の順に高く、下位群の Token が他の群に比べて高い傾向にある。これは、上位群の場合、同じ語彙を避けて類義語(例えば、쇼핑을 하다고 구입하다)をよく使うのに対し、下位群の場合は同じ語彙を繰り返して使用するため、延べ語数(Token)が他の群に比べて多くなったと考えられる。

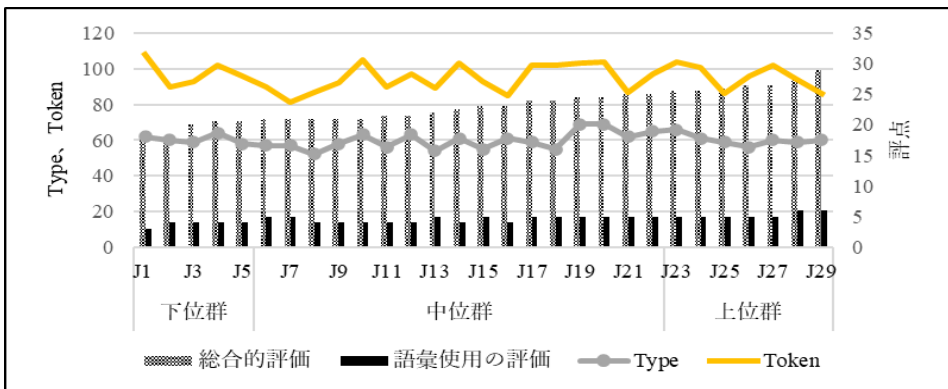


図4. Type と評価、Token と評価

図5は、品詞ごとの Type と Token を示したものであるが、下位群は、特に動詞の Token と Type が一番多いことが分かる。これは上位群の場合、既習語彙を適切に使用し作文をする傾向にあるのに対し、下位群の場合は既習語彙がまだ身につけておらず、辞書使用に頼って日本語の文章をそのまま韓国語に訳したからだと考えられる。

また、すべての群において Token と Type は大体比例しているが、下位群は他の群に比べて助詞の Token が一番多いのに対して Type は一番少ない。このことから、下位群は作文に使用している助詞の数は多いが、同一のものを繰り返して使っていることが分かる。これは下位群の助詞使用に関する指導を強化する必要性を示唆する。

これらの結果を直ちに一般化するには研究対象数が十分とは言えないが、各群における品詞使用の様子をある程度捉えることはできるであろう。このように、学習者の作文における Type と Token を考察することで、学習者に不足している語彙知識が何か分かり、語彙教育に関わる教育的示唆を得ることができると考えられる。

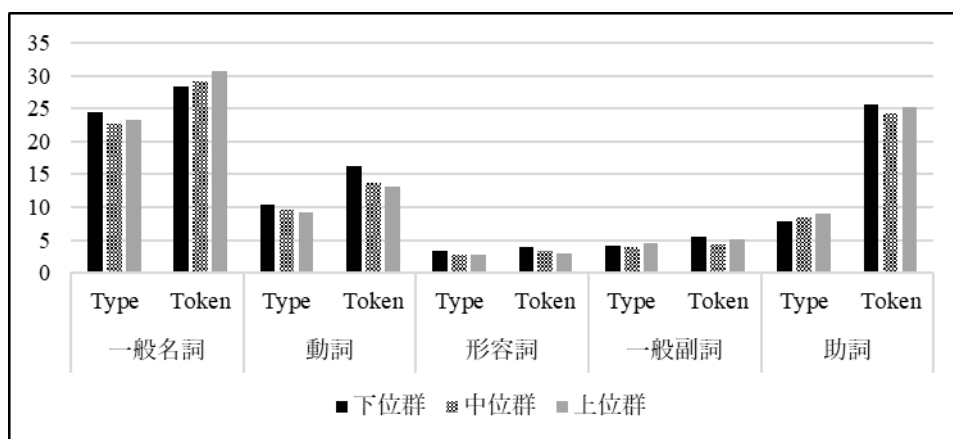


図5. 品詞ごとの Type と Token

4.3 語彙の豊富さの測定結果

4.3.1 語彙多様性(TTR)

各群の平均 TTR は、中位群(63.40) > 上位群(63.16) > 下位群(62.14)の順に高く、

下位群が一番低い結果となった(図 6)¹¹。これは、下位群は中位群と上位群に比べて同一の語彙を繰り返して使っており、中位群と上位群は下位群より多様な語彙を使っている傾向にあることを示唆する。例えば、下位群の J1 は「가다」と「좋아하다」をそれぞれ 5 回、4 回使用しているが、上位群の J28 は「가다」と「좋아하다」をそれぞれ 2 回ずつ使用しており、同じ語彙の繰り返しは少なかった。

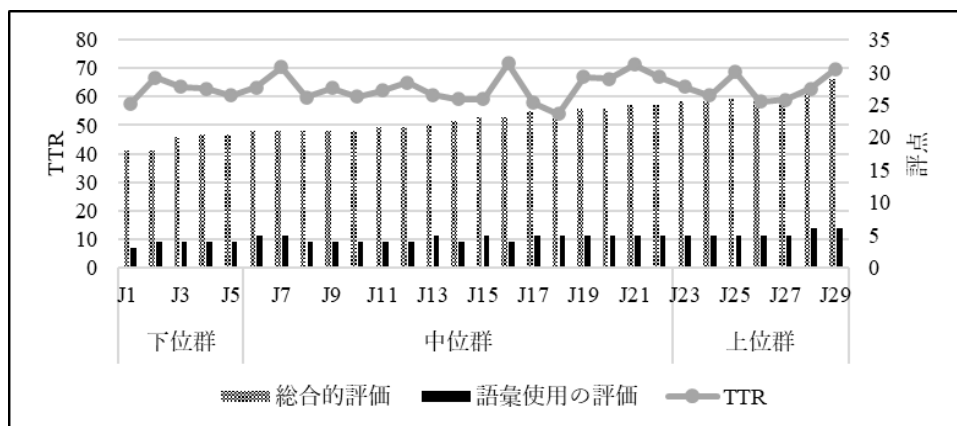


図 6. 語彙多様性(TTR)と評価

4.3.2 語彙密度(LD)

各群の平均語彙密度は、下位群(55.03) > 上位群(54.44) > 中位群(53.50)の順に高く、下位群の平均語彙密度が一番高い結果となった(図 7)。これは下位群の学習者は既習の文法や語彙を適切に使用するのに長けておらず、内容語を並べるケースが多いからだと考えられる。また、知らない語彙については辞書を調べて使用したため、その用法を熟知できず、間違った表現になったことが、低い評価に繋が

¹¹ TTR はテキストの長さに影響されるため、本研究では長さを約 300 字に限定し資料を集めたが、この限定により、今回の分析対象になった作文には評点が格段に低い学習者はほとんど含まれていない。このことが各群の TTR に大きな差が見られない原因の 1 つとなったと考えられる。ところで、강정희(2020 : 58)では、初級学習者の作文は多様な語彙を駆使するレベルに至っておらず、生活文にとどまっているため、TTR の測定に適していないと判断し、初級学習者の作文は研究対象から外している。また、안경화(2003)、강정희(2020)のように学習者の熟達度が上がると TTR が高くなるという研究と、원미진他(2017)、주우동(2019)のように熟達度と TTR の間に相関関係がないという研究もあり、TTR と熟達度の関係は研究者の基準や作文のテーマ、学習者の母語、学習レベルなどによって影響を受ける可能性が高いと言える。

ったと考えられる¹²。このことは、熟達度が低い学習者は冠形詞、補助動詞などの機能語より内容語を多く使うために語彙密度が高いとしている강정희(2020)の研究結果に相当するものである。ただ、韓国語教育における学習者の熟達度と語彙密度の相関関係については、その見解が一致しておらず、원미진他(2017)、이경(2014)では学習者の作文の点数が上がるとその作文の語彙密度は高くなるとしている。

ところで、語彙密度は延べ語数に対する内容語の割合を示しているが、内容語を効果的に使っているかどうかを評価する指標ではないため、語彙密度が学習者の語彙能力を判断する指標として妥当であるかどうかは議論の余地がある(강정희 2020 : 179)。

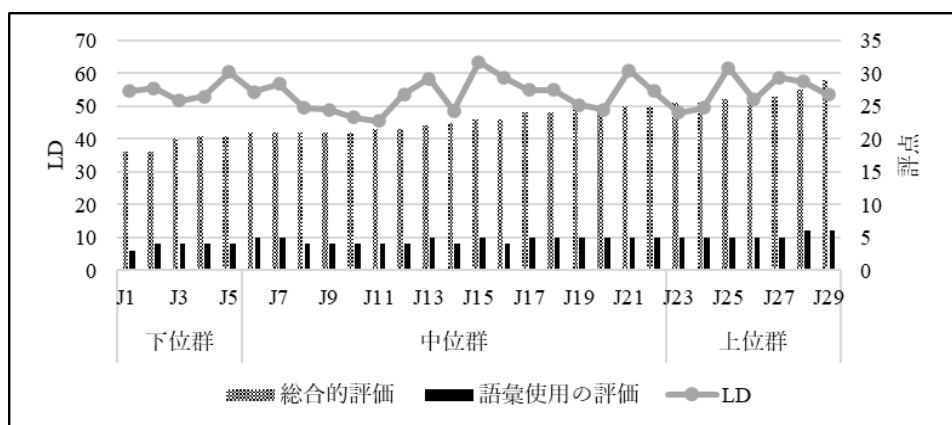


図7. 語彙密度(LD)と評価

4.3.3 語彙洗練性(LS)

원미진他(2017)、강정희(2020)では語彙洗練性と学習者の熟達度間に有意な差異があるとしている。また、장연지・김한샘(2018)では、学習者の熟達度が上がるにつれて、低頻度語の使用が増えているとしている。これらの研究では、日本人学習者と中国人学習者を対象とした강정희(2020)以外は中国人学習者を対象と

¹² 例えば、前述の例文(1)の学習者は「鶏(肉)」を「닭고기」ではなく「새」と書いている。これは、インターネット辞書やスマートフォンの辞書アプリで検索する時、漢字の「鶏」ではなく、平仮名を使うと、「새」という単語になるが、学習者が用法を確認せず、そのまま引用した時の誤用であると考えられる。

しているが、学習者の母語に関係なく学習レベルが上がるにつれて低頻度語の使用が増えることは予測できる結果である。

ところが、本研究では、平均語彙洗練性は下位群(8.50) > 中位群(7.63) > 上位群(7.19)の順に高く、下位群が一番高い結果となった(図8)。下位群と中位群の中には、上位群より低い語彙洗練性を見せる学習者もいるが、平均的に上位群より高い。また、図8に見るように、すべての群において語彙洗練性のばらつきが大きい。

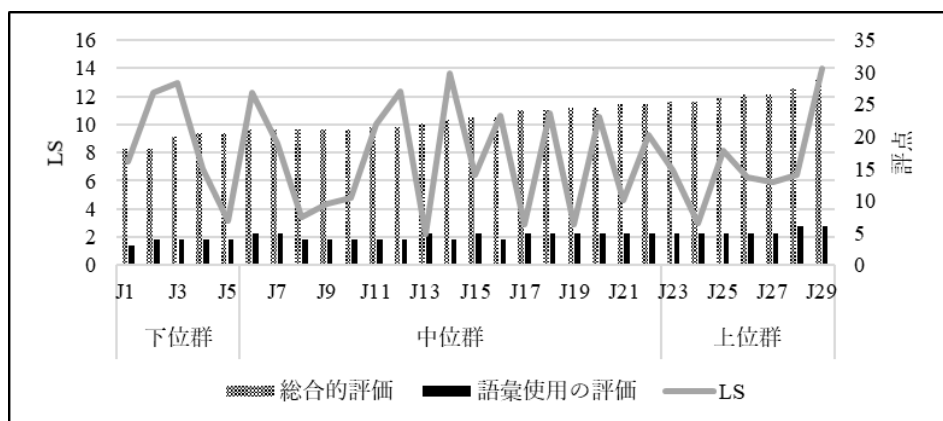


図8. 語彙洗練性(LS)と評価

表5は各群の低頻度語の一部をまとめたものであるが、本研究で研究対象としている作文のテーマが自己紹介文であることから、すべての群において学校(학교, 동아리, 과목など)、専攻分野(정치, 경제, 생명, 화학など)、趣味(케이팝, 커버댄스, 패션, 동영상, 맛집, 먹방など)関連の語彙が共通して見られた(例文(3)~(6))。この低頻度語のほとんどは授業時に学んだ既習語彙ではないことから、下位群の語彙洗練性が高いことは作文を書く際に辞書を使用したことが関連していると考えられる¹³。

¹³ このような辞書使用が語彙の豊富さに及ぼす影響については後続研究で考察することとする。

表 5. 各群における内容語の低頻度語の例

| | 一般名詞 | 動詞 | 形容詞 | 一般副詞 |
|-----|---|--|---------|---------------|
| 下位群 | 학과(2), 동아리(2), 자막(1), 학부(1), 생명(1), 화학(1), 가사(1), 패션(1), 사인회(1), 멤버(1), 기대(1), 계기(1), 예정(1), 절경(1), 잡화점(1), 인간(1) | (예를)들다(2), 참석하다(1), 연속하다(1), 우승하다(1), 조사하다(1), 검색하다(1), 도전하다(1), 출장하다(1), 빠지다(1), 위하다(1) | なし | 정말로(1), 매번(1) |
| 中位群 | 학과(9), 아이돌(7), 케이팝(4), 자막(4), 학부(3), 패션(3), 감상(3), 동아리(2), 떡방(2), 그룹(3), 목표(2), 정치(1), 경제(1), 심리(1), 곡(1), 커버 댄스(1), 사인회(1), 팬클럽(1), 동영상(1), 목표(1), 흥미(1), 매력(1), 자격(1), 예정(1), 스타일(1), 요가(1), 혈액형(1) | 소속되다(2), 살찌다(1), 풀리다(1), 작성하다(1), 가입하다(1), 취득하다(1), 위하다(1), 관하다(1), 복돋우다(1) | 아쉽다(1) | 인젠가(3), 원래(1) |
| 上位群 | 학과(4), 동아리(4), 예정(2), 과목(1), 단위(1), 심리(1), 사회(1), 화학(1), 커뮤니케이션(1), 어학(1), 통역(1), 사인회(1), 매력(1), 맛집(1) | 소속하다(1), 이루다(1), 구입하다(1), 돌아가시다(1), 위하다(1), 취득하다(1), 이수하다(1) | 유일하다(1) | 일단(1), 마치(1) |

()内は出現頻度数

- (3) 교양학부 인간환경학과이고 사회복지를 공부하고 있습니다. (J6)
- (4) 테니스 서클에 소속되어 있습니다. (J24)
- (5) 취미는 많이 있습니다. 여행을 가는 것, 떡방 동영상 시청, 밥을 먹는 것입니다. (J18)
- (6) 인스타그램에서 맛집과 카페를 찾고 친구와 함께 갑니다. (J25)

4.4 各群の比較

4.4.1 各群における作文評価と語彙の豊かさの比較

各群の語彙指標の差異を調べるため、一元配置分散分析と多重比較(Scheffe method)を行った結果は表 6 のとおりである。

表 6. 各群における作文評価と語彙の豊かさの比較

| | 下位群 (N=5) | | 中位群 (N=17) | | 上位群 (N=7) | | F 値 | P 値 | 多重比較 |
|-------------------|--------------|------|---------------|------|--------------|------|--------|---------|-------------|
| | M | SD | M | SD | M | SD | | | |
| 1. 総合的評価 | 19.4 | 1.92 | 22.68 | 1.55 | 26.64 | 1.25 | 37.99 | .000*** | 上位群>中位群>下位群 |
| 2. 語彙使用の 評価 | 3.80 | .447 | 4.59 | .507 | 5.29 | .488 | 13.277 | .000*** | 上位群>中位群>下位群 |
| 3. 語節数 | 71.00 | 4.64 | 67.59 | 4.69 | 67.86 | 3.67 | 1.161 | .329 | ns |
| 4. 文数 | 11.00 | 2.92 | 12.47 | 2.29 | 11.00 | 2.16 | 1.352 | .276 | ns |
| 5. 1 文当たり の語節数 | 6.89 | 2.10 | 5.58 | 1.05 | 6.34 | 1.03 | 2.400 | .111 | ns |
| 6. Type | 60.60 | 2.41 | 59.76 | 4.99 | 60.14 | 3.02 | .079 | .925 | ns |
| 7. Token | 97.80 | 7.23 | 94.53 | 7.64 | 95.57 | 7.39 | .369 | .695 | ns |
| 8. TTR | 62.14 | 3.46 | 63.40 | 5.05 | 63.16 | 4.53 | .139 | .871 | ns |
| 9. LD | 55.03 | 3.37 | 53.50 | 5.15 | 54.44 | 5.02 | .228 | .798 | ns |
| 10. LS | 8.50 | 4.06 | 7.63 | 3.84 | 7.19 | 3.36 | .180 | .836 | ns |

M=mean、SD=standard division、*** $p<.001$ 、ns=not significant.

総合的評価と語彙使用の評価は各群の間に統計的に有意な差が見られた。また、多重比較によれば、語彙使用の評価も上位群>中位群>下位群の順に評価が高いことが分かる。一方、語彙指標は平均値で比較すれば、下位群が他の群より高い傾向が見られたが、いずれも有意差は認められなかった¹⁴。これは語彙使用において各群の間に量的にはあまり差がないということの意味する。

ところが、下位群の TTR は他の群に比べて低く、これは下位群の学習者が同一の語彙を多く繰り返して使用していることを示唆している。また、LD と LS の平均値も下位群が一番高いが、これは下位群の学習者が辞書を積極的に使用した可能性を排除できない¹⁵。つまり、中・上位群は既習語彙を適切に使用して作文を

¹⁴ 1 級から 6 級の中国人学習者と日本人学習者の作文における Type と Token を考察した 강정희(2018: 50)によると、熟達度が上がるにつれて Type と Token は増えるが、1 級と 2 級の間では有意な差は見られなかった。したがって、1 級と 2 級レベルの学習者を対象としている本研究においても各群の間に有意な差が示されなかった可能性が考えられる。

¹⁵ 中国人韓国語学習者の語彙の豊富さについて考察した 원미진他(2017)では、TOPIK の中級レベル(3 級)の学習者の語彙多様性は 60.26、語彙密度は 60.82、語彙洗練性は 12.43 であり、学習レベルが上がるにつれてそれぞれの語彙指標も高くなるとしている。本研究の研究対象者は TOPIK の初級レベル(1 級、2 級)であるが、원미진他(2017)の中級レベル(3 級)の学習者と似たよう

するのに対し、下位群の学習者は既習語彙がまだ十分に身につけておらず、日本語をそのまま訳して作文をする場合が多いため、未習の低頻度語が多く出現したと考えられる。

このように下位群の語彙指標の平均値が他の群に比べて高いにも関わらず、総合的評価と語彙使用の評価が低い。このことから、各群では作文評価に関わる語彙使用の特徴は異なる様相を示すことが予測される。そこで、次節では、各群における自己紹介文の評点と語彙指標との相関関係について分析し、各群における語彙使用の特徴を考察する。

4.4.2 各群における作文評価と語彙の豊富さを表す指標の相関関係

自己紹介文の評点と語彙指標との相関関係を示すと、表7から表9のとおりである。

下位群では、表7に見るように、語彙使用の評価は総合的評価との間に有意な相関は見られなかった($r = .605$)。また、総合的評価とLS、語彙使用の評価とTTRは中程度に関連していたが、いずれの関連も統計的に有意ではなかった(それぞれ $r = .416$, $r = .764$)。これは、語彙使用以外の評価基準が総合的評価に影響していることを意味する。辞書使用を許可したこともあって、下位群は語彙の量的な面からは中位群と上位群より高い傾向にあるものの、語彙や文法をまだ使いこなせていないことが低い評価に繋がったと考えられる。また、総合的評価とTTRおよびLD、語彙使用の評価とLD、LSとの間にも相関は認められなかった(それぞれ $r = -.009$, $r = .080$, $r = .067$, $r = .151$)。これは、下位群の場合、語彙の豊富さを表す指標は作文評価に影響を及ぼしていないことを意味する。

一方、語節数は、文数とLSとの間に強い負の相関が認められたが(それぞれ $r = -.906^*$, $r = -.893^*$)、これは下位群が書いた作文は、1文当たりの語節数が多い傾向にあり、語節数が多くなると低頻度語の割合が減少することを示している。

な結果が得られたことから、辞書の使用が語彙の豊富さに影響を及ぼしていると考えられる。

表 7. 下位群における評価と語彙指標の相関行列

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
|--------------|-------|-------|--------|---------|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 1. 総合的評価 | 1 | | | | | | | | | |
| 2. 語彙使用の評価 | .605 | 1 | | | | | | | | |
| 3. 語節数 | .229 | -.362 | 1 | | | | | | | |
| 4. 文数 | -.398 | .383 | -.906* | 1 | | | | | | |
| 5. 1文当たりの語節数 | .339 | -.353 | .937* | -.984** | 1 | | | | | |
| 6. Type | -.096 | -.325 | .493 | -.570 | .666 | 1 | | | | |
| 7. Token | -.096 | -.789 | .761 | -.855 | .841 | .655 | 1 | | | |
| 8. TTR | -.009 | .764 | -.667 | .745 | -.656 | -.146 | -.841 | 1 | | |
| 9. LD | .080 | .067 | .400 | -.077 | .077 | -.508 | -.105 | -.229 | 1 | |
| 10. LS | .416 | .151 | -.893* | .763 | -.750 | -.061 | -.498 | .640 | -.697 | 1 |

* $p < .05$, ** $p < .01$

中位群では、表 8 に見るように、語彙使用の評価は総合的評価との間に正の相関が認められた($r = .575^*$)。これは、初級語彙を正確に使っていることが総合的評価に影響していることを意味する。また、総合的評価は語節数と Type との間に有意な正の相関が見られたが(それぞれ、 $r = .505^*$ 、 $r = .538^*$)、TTR、LD、LS との間には有意な相関を示さなかった(それぞれ $r = .183$ 、 $r = .317$ 、 $r = -.060$)。このことから、中位群では異なる語彙を多様に使って作文をする場合、総合的評価が上がる傾向にあるが、低頻度語の割合は総合的評価にあまり影響を及ぼさないことが分かった。

一方、語彙使用の評価は、TTR と LS との間に相関は見られなかったが、LD との間には有意な正の相関が認められた(それぞれ $r = .070$ 、 $r = -.182$ 、 $r = .550^*$)。これは内容語の割合が高くなると、語彙使用に関する評価が上がるが、多様な語彙を使ったり、低頻度の語彙を多く使うことは語彙使用の評価にあまり影響を及ぼさないことを示唆する。

表 8. 中位群における評価と語彙指標の相関行列

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
|------------------|-------|-------|--------|---------|-------|-------|-------|------|-------|----|
| 1. 総合的評価 | 1 | | | | | | | | | |
| 2. 語彙使用の評価 | .575* | 1 | | | | | | | | |
| 3. 語節数 | .505* | .318 | 1 | | | | | | | |
| 4. 文数 | -.227 | -.199 | -.033 | 1 | | | | | | |
| 5.1 文当たりの 語節数 | .374 | .306 | .371 | -.904** | 1 | | | | | |
| 6. Type | .538* | .107 | .164 | -.502* | .477 | 1 | | | | |
| 7. Token | .377 | .044 | .699** | -.168 | .372 | .541* | 1 | | | |
| 8. TTR | .183 | .070 | -.532* | -.357 | .113 | .485* | -.470 | 1 | | |
| 9. LD | .317 | .550* | .210 | .057 | .033 | -.227 | -.440 | .238 | 1 | |
| 10. LS | -.060 | -.182 | .083 | .045 | -.163 | .136 | .071 | .087 | -.104 | 1 |

* $p < .05$, ** $p < .01$

上位群では、表 9 に見るように、語彙使用の評価は総合的評価との間に強い正の相関が認められた($r = .879^*$)。これは、初級語彙を正確に使っていることが総合的評価に大きく影響していることを意味する。また、LS は総合的評価との間に有意な正の相関が認められたが¹⁶、TTR と LD との間に相関は示されなかった(それぞれ $r = .806^*$ 、 $r = .467$ 、 $r = .222$)。これは低頻度語の割合が高くなると総合的評価が上がることを示唆する。上位群の学習者は文法や表現などの間違いが少ない分、低頻度語を多く使用することがより高い評価に繋がったと考えられる。

一方、語彙使用の評価は、TTR、LS の両方と中程度に関連していたが、いずれの関連も統計的に有意ではなく、LD との間にも有意な相関は見られなかった(それぞれ $r = .468$ 、 $r = .605$ 、 $r = .141$)。このことから、上位群では多様な語彙を使ったり、内容語や低頻度語を多く使用することは語彙使用の評価には影響を及ぼさないことが分かった。

また、上位群の語節数は、Token との間に強い正の相関が、LS との間には強い

¹⁶ Linnarud(1986)では LS がスウェーデン学生の作文に対する評価と強い相関関係があるとしており(Read 2000 : 203-204)、中国人韓国語中・上級学習者を対象とした원미진他(2017)でも LS と作文評価に相関関係があることが報告されている。一方、中国人韓国語中級学習者を対象とした子우동(2019)では LS と作文の評価との間には相関関係がないとしている。本研究では上位群の場合のみ LS と総合的評価との間に相関が認められたが、学習者全体の LS と総合的評価との間には相関は見られなかった($r = -.075$)。このように LS と作文評価の相関関係は、学習者の母語や学習レベル、作文のテーマなどによってその結果は異なってくると考えられる。

負の相関が認められたが(それぞれ $r = .950^{**}$ 、 $r = -.823^{*}$)、これは語節数が増える
と延べ語数が増え、低頻度語の割合が低くなることを示している。また、TTR と
LS の間にも強い正の相関が認められたが($r = .786$)、これは多様な語彙を豊富に使
う学習者は低頻度でより高いレベルの中・上級の語彙を使う可能性があることを
意味する。

表 9. 上位群における評価と語彙指標の相関行列

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
|-------------------|--------------------|-------|--------------------|---------------------|-------|-------|--------------------|-------------------|------|----|
| 1. 総合的評価 | 1 | | | | | | | | | |
| 2. 語彙使用の評価 | .879 ^{**} | 1 | | | | | | | | |
| 3. 語節数 | -.740 | -.625 | 1 | | | | | | | |
| 4. 文数 | -.062 | -.158 | .231 | 1 | | | | | | |
| 5. 1 文当たりの 語節数 | -.173 | -.067 | -.005 | -.966 ^{**} | 1 | | | | | |
| 6. Type | -.337 | -.145 | .438 | -.561 | .676 | 1 | | | | |
| 7. Token | -.624 | -.515 | .950 ^{**} | .324 | -.108 | .488 | 1 | | | |
| 8. TTR | .467 | .468 | -.756 [*] | -.778 [*] | .617 | .162 | -.782 [*] | 1 | | |
| 9. LD | .222 | .141 | -.298 | -.050 | -.069 | -.481 | -.529 | .262 | 1 | |
| 10. LS | .806 [*] | .605 | -.823 [*] | -.381 | .183 | -.055 | -.725 | .786 [*] | .180 | 1 |

* $p < .05$ 、** $p < .01$

5. まとめと今後の課題

本研究では、語彙の豊かさを測る客観的な語彙指標を用いて、日本人韓国語初
級学習者の自己紹介文における使用語彙の特徴を、総合的評価により下位群、中
位群、上位群に分けて分析した。特に語彙の豊富さを表す語彙指標に注目し、各
群の作文における総合的評価および語彙使用の評価との相関関係を考察した。そ
の結果、各群の間で統計的に有意な差は見られなかったものの、下位群の指標が
他の群に比べて比較的高い傾向にあることが分かった。一方、語彙指標と総合的
評価、語彙使用の評価をそれぞれ考察した結果、各群において異なる相関関係
を示していることが明らかとなった。その結果をまとめると以下のとおりである。

- (1) 各群の平均 Type は、下位群 > 上位群 > 中位群の順で高かったが、Type は各群
の間に大きな差は見られなかった。一方、平均 Token は、下位群 > 上位群 >

中位群の順に高く、下位群の Token が他の群に比べて高い傾向にあった。このことから、上位群は、類義語や他の語彙を多く使うのに対し、下位群は同じ語彙を繰り返して使用することが分かった。

- (2) 各群の品詞ごとの Type と Token では、他の群に比べて下位群の動詞の Token と Type が一番多かった。これは、上位群が既習の語彙を適切に使用し作文をする傾向にあるのに対し、下位群は辞書使用に頼って作文をした可能性があるからだと考えられる。また、下位群は他の群に比べて助詞の Token が一番多いのに対して Type は一番少なかったことから、下位群は同一の助詞を繰り返して使っていると言える。このことから、下位群の助詞使用に関する指導を強化する必要性が示唆された。
- (3) 総合的評価と語彙使用の評価は各群の間に有意な差が見られており、語彙使用の評価も上位群 > 中位群 > 下位群の順に高かった。
- (4) 語彙の豊富さを表す語彙指標は、平均値で比較すれば、下位群は文数と TTR 以外の語彙指標において他の群より高い傾向が見られたが、いずれも有意差は認められず、語彙使用において各群の間に量的にはあまり差がない結果となった。
- (5) 総合的評価と語彙使用の評価に関わる語彙使用の様相は各群別に異なっており、日本人初級学習者における語彙指導の方向性が示唆された。下位群は、辞書を使用したことで中位群や上位群より豊富な語彙を使用できているが、語彙の豊富さを表す指標が総合的評価と語彙使用の評価との間に相関が認められなかったことから、多様な語彙を正確に使用する必要があると考えられる。中位群では異なる語彙を多様に使って作文をする場合、総合的評価が上がり、内容語の割合が高くなると語彙使用の評価が上がる傾向にあったが、低頻度語を使用することは総合的評価と語彙使用の評価にあまり影響を及ぼしていない。このことから、中級以上の低頻度語を適切に使うことで作文の質を高めることができると考えられる。上位群では低頻度語の割合が高くなると、総合的評価が上がる傾向にあるが、多様な語彙を使ったり、内容語や低頻度語を多く使用することは語彙使用の評価には影響を及ぼさないことが分かった。

本研究は日本人韓国語初級学習者における使用語彙の様相を語彙の豊富さという指標を用いて量的に把握し、作文における評点と語彙の豊富さを表す指標との相関関係が考察できたという点で意義があると考えられる。このような語彙指標

을利用することで、學習者に不足している語彙能力の把握という語彙教育に関わる教育的示唆を得ることができると考えられる。また、作文評価において評価者の主観的評価とともに、客観的な評価方法として取り入れることもできるであろう。

しかし、日本人初級學習者の作文における使用語彙の特徴についてはある程度把握できたものの、量的な分析を中心に行ったため、質的に使用語彙の相違の原因までは言及できていない。特に本研究では、長さがある程度一致する作文のみを研究対象としたため、研究資料数が十分とは言えない。また、自己紹介文という作文テーマの性格上、多様な語彙は出現しなかったことや辞書使用を許可していることも語彙の量的な面においてあまり差が見られなかった結果に繋がったと考えられる。

今後は、學習者の母語である日本語が作文の過程にどのように干渉しているのか、辞書使用が作文作成にどのような影響を及ぼしているかなどについて、學習者へのインタビューや日本語と韓国語の両方で作成された資料の分析も含めて検討する必要があると言える。これらを踏まえて、日本人初級學習者における使用語彙の実態についてさらなる検討を進めていくこととする。

参考文献

- 강범모·김흥규 (2009) 한국어 사용빈도. 한국문화사
- 강정희 (2020) 한국어 학습자의 어휘 능력 연구:쓰기 텍스트의 어휘 풍요도를 중심으로. 동국대학교 대학원 박사학위 논문
- 김미옥 (2003) 한국어 학습자의 단계별 언어권별 어휘 오류의 통계적 분석. 한국어 교육, 14(3), 31-52.
- 구다영 (2017) 한국어 중급 학습자의 작문에 나타난 어휘 다양성 연구:다문화가정 자녀와 외국인 학습자를 대상으로. 경희대학교 대학원 석사학위 논문
- 남주연 (2015) 한국어 학습자의 구어 복잡성 연구:통사 및 어휘 복잡성을 중심으로. 경희대학교대학원 박사학위 논문
- 남주연·김영주·김양희 (2017) 한국어 학습자의 문어 어휘 다양성 연구:구어 어휘 다양성과의 비교를 중심으로. 한국어 의미학, 55, 1-28.
- 박정은·김영주 (2014) 한국어 고급 학습자의 작문에 나타난 어휘의 다양성. 한국어교육, 25, 1-32.
- 배도용 (2012) 한국어 학습자의 쓰기에 나타난 어휘 다양도 및 어휘 밀도 연구. 언어과학, 19, 99-117.
- 배도용 (2014) 한국어 학습자 문어 산출물에 나타난 어휘 풍요도 측정을 위해 해결해야 할 몇 가지 문제. 우리말연구, 36, 133-156.
- 안경화 (2003) 중간언어 어휘론 연구의 과제와 전망. 이중언어학, 23, 167-186.
- 안의정 (2017) 한국어 텍스트의 어휘 다양도와 어휘 밀도 분석. 언어사실과 관점, 41, 349-365.
- 원미진·왕역문·주우동·왕호 (2017) 한국어 학습자의 쓰기에 나타난 어휘 풍요도 연구:숙달도 측정 도구로써 어휘 풍요도 측정 가능성을 중심으로. 어문논총, 71, 33-35.
- 이경 (2014) 담화 차원에서의 한국어 어휘 유창성 신장 방안 연구. 고려대학교 대학원 박사학위 논문

- 장연지·김한샘 (2018) 어휘 정교도 측정을 위한 기초 연구. 국제어문, 79, 85-108.
- 조숙연·박영민 (2018) Sheffield 대학교 한국어 학습자의 작문 특성 분석. 작문연구, 38, 149-172.
- 주우동 (2019) 한국어 학습자의 쓰기 자료에 나타난 복잡성 및 정확성 연구-숙달도 측정 지표로서의 활용 가능성. 학습자중심교과교육연구, 19(21), 1387-1411.
- 진대연 (2006) 한국어 쓰기능력 구성요소로서의 어휘에 대한 연구. 이중언어학, 30, 279-411.
- 허원진·이민우 (2019) 한국어 학습자의 숙달도별 어휘 사용 양상. 이중언어학, 77, 215-240.
- 石黒圭 (2016) 『語彙力を鍛える:量と質を高めるトレーニング』 光文社
- 金珉秀 (2020) 「日本人韓国語学習者の作文の評価に関わる語彙使用の特徴」 第11回日本韓国語教育学会(Web開催)
- 田島ますみ, 深田淳, 佐藤尚子 (2008) 語彙多様性を表す指標の妥当性に関する研究: 日本人大学生の書き言葉コーパスの場合, 中央学院大学社会システム研究年報, 9(1), 51-62.
- Johansson, V. (2008). Lexical diversity and lexical density in speech and writing: A developmental perspective. Lund University, Dept. of Linguistics and Phonetics Working Papers, 53, 61-79.
- Laufer, B & Nation (1995). Vocabulary Size and Use-Lexical Richness in L2 Written Production. Applied Linguistics 16, 307-322.
- Read, J. (2000). Assessing vocabulary. Cambridge University Press.
- Engber, C. (1995). The relationship of lexical proficiency to the quality of ESL compositions. Journal of Second Language Writing, 4(2), 139-155.
- Linnarud, M. (1986). Lexis in Composition : A performance analysis of Swedish learners' written English. Malmö: CWK Gleerup.
- Miller, J. F. (1991). Quantifying Productive language disorders. In J. F. Miller(Ed.). Research on Child Language Disorders: A Decade of Progress. Austin, TX: Pro-Ed.
- Ure, J. (1971). Lexical Density and Register Differentiation. Contemporary Educational Psychology, 5, 96-104.

【附記】

本稿は、日本韓国語教育学会第11回(2020年10月31日、Web開催)での口頭発表の内容に加筆し、修正を加えたものである。貴重なご意見、ご指摘をくださった方々に心より感謝申し上げます。

(東海大学国際教育センター)

kimminsoo@tokai-u.jp

<付録>

表 10. 下位群の語彙指標

| | 総合的 評価 | 語彙使用 の評価 | 語節数 | 文数 | 1文当たり の語節数 | Type | Token | TTR | LD | LS |
|------|-----------|-------------|------|------|---------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| J1 | 18 | 3 | 74 | 9 | 8.22 | 62 | 108 | 57.41 | 54.63 | 7.41 |
| J2 | 18 | 4 | 67 | 15 | 4.47 | 60 | 90 | 66.67 | 55.56 | 12.22 |
| J3 | 20 | 4 | 65 | 13 | 5.00 | 59 | 93 | 63.44 | 51.61 | 12.90 |
| J4 | 20.5 | 4 | 75 | 8 | 9.38 | 64 | 102 | 62.75 | 52.94 | 6.86 |
| J5 | 20.5 | 4 | 74 | 10 | 7.40 | 58 | 96 | 60.42 | 60.42 | 3.13 |
| 平均 | 19.4 | 3.80 | 71 | 11 | 6.89 | 60.60 | 97.80 | 62.14 | 53.03 | 8.50 |
| 標準偏差 | 1.29 | .447 | 4.64 | 2.92 | 2.10 | 2.41 | 7.22 | 3.46 | 3.37 | 4.06 |

表 11. 中位群の語彙指標

| | 総合的 評価 | 語彙使用 の評価 | 語節数 | 文数 | 1文当たり の語節数 | Type | Token | TTR | LD | LS |
|------|-----------|-------------|-------|-------|---------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| J6 | 21 | 5 | 65 | 13 | 5.00 | 57 | 90 | 63.33 | 54.44 | 12.22 |
| J7 | 21 | 5 | 61 | 12 | 5.08 | 57 | 81 | 70.37 | 56.79 | 8.64 |
| J8 | 21 | 4 | 62 | 18 | 3.44 | 52 | 87 | 59.77 | 49.43 | 3.45 |
| J9 | 21 | 4 | 63 | 11 | 5.73 | 58 | 92 | 63.04 | 48.91 | 4.35 |
| J10 | 21 | 4 | 68 | 13 | 5.23 | 63 | 105 | 60.00 | 46.67 | 4.76 |
| J11 | 21.5 | 4 | 62 | 13 | 4.77 | 56 | 90 | 62.22 | 45.56 | 10.00 |
| J12 | 21.5 | 4 | 71 | 11 | 6.45 | 63 | 97 | 64.95 | 53.61 | 12.37 |
| J13 | 22 | 5 | 66 | 9 | 7.33 | 54 | 89 | 60.67 | 58.43 | 2.25 |
| J14 | 22.5 | 4 | 71 | 12 | 5.92 | 61 | 103 | 59.22 | 48.54 | 13.59 |
| J15 | 23 | 5 | 73 | 17 | 4.29 | 55 | 93 | 59.14 | 63.44 | 6.45 |
| J16 | 23 | 4 | 64 | 13 | 4.92 | 61 | 85 | 71.76 | 58.82 | 10.59 |
| J17 | 24 | 5 | 73 | 13 | 5.62 | 59 | 102 | 57.84 | 54.90 | 2.94 |
| J18 | 24 | 5 | 78 | 13 | 6.00 | 55 | 102 | 53.92 | 54.90 | 10.78 |
| J19 | 24.5 | 5 | 71 | 9 | 7.89 | 69 | 103 | 66.99 | 50.49 | 2.91 |
| J20 | 24.5 | 5 | 67 | 12 | 5.58 | 69 | 104 | 66.35 | 49.04 | 10.58 |
| J21 | 25 | 5 | 67 | 11 | 6.09 | 62 | 87 | 71.26 | 60.92 | 4.60 |
| J22 | 25 | 5 | 67 | 12 | 5.58 | 65 | 97 | 67.01 | 54.64 | 9.28 |
| 平均 | 22.68 | 4.59 | 67.59 | 12.47 | 5.58 | 59.76 | 94.53 | 63.40 | 53.50 | 7.63 |
| 標準偏差 | 1.55 | .507 | 4.69 | 2.29 | 1.05 | 4.99 | 7.64 | 5.05 | 5.15 | 3.84 |

表 12. 上位群の語彙指標

| | 総合的 評価 | 語彙使用 の評価 | 語節数 | 文数 | 1文当たり の語節数 | Type | Token | TTR | LD | LS |
|------|-----------|-------------|-------|-------|---------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| J23 | 25.5 | 5 | 71 | 10 | 7.10 | 66 | 104 | 63.46 | 48.08 | 6.73 |
| J24 | 25.5 | 5 | 71 | 10 | 7.10 | 61 | 101 | 60.40 | 49.50 | 2.97 |
| J25 | 26 | 5 | 65 | 9 | 7.22 | 59 | 86 | 68.60 | 61.63 | 8.14 |
| J26 | 26.5 | 5 | 67 | 15 | 4.47 | 56 | 96 | 58.33 | 52.08 | 6.25 |
| J27 | 26.5 | 5 | 72 | 12 | 6.00 | 60 | 102 | 58.82 | 58.82 | 5.88 |
| J28 | 27.5 | 6 | 67 | 12 | 5.58 | 59 | 94 | 62.77 | 57.45 | 6.38 |
| J29 | 29 | 6 | 62 | 9 | 6.89 | 60 | 86 | 69.77 | 53.49 | 13.95 |
| 平均 | 26.64 | 5.29 | 67.86 | 11.00 | 6.34 | 60.14 | 95.57 | 63.16 | 54.44 | 7.19 |
| 標準偏差 | 1.25 | .488 | 3.67 | 2.16 | 1.03 | 3.02 | 7.39 | 4.53 | 5.02 | 3.36 |

韓国語教育研究 (第 1 1 号)

2021 年 9 月 15 日 発行

発行者 文 慶喆

発行所 日本韓国語教育学会

〒577-8052 大阪府東大阪市小若江 3-4-1

近畿大学 国際学部 酒匂康裕 研究室気付

編集者 『韓国語教育研究』編集委員会

金世徳、柳朱燕

印刷所 株式会社 仙台共同印刷
